いつも主にあって喜びなさい（フィリピの信徒への手紙講解）

第６講:キリストの福音にふさわしい生き方(フィリピ１章 27～30 節､2024 年４月 28 日）

〔今週の御言葉-私訳と黙想 フィリピ１章 27～30 節 キリストの福音にふさわしい生き方〕

27 ただキリストの福音にふさわしい生活をしなさい。そうすれば、わたしが行って、あなたがたに会うとしても、わたしがいないとしても、あなたがたについてわたしは聞くでしょう。あなたがたが一つの霊によって立っており、一つの思いをもって福音の信仰のために共に奮闘しており、28 そして敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはないと。そのことは彼らにとっては滅びのしるしであり、あなたがたにとっては救いのしるしです。そしてこのことは神によることです。29 あなたがたはキリストのために恵みを授けられます。すなわち、ただ彼（キリスト）を信じることだけではなく、彼のために苦しむということです。30 あなたがたは、以前わたしにおいて見たこと、また今聞いていることと同じ戦いをしているのです。

パウロは「**キリストの福音にふさわしい生活をしなさい**」と勧めます。「**キリストの福音にふさわしい生活**」とは、どのような生き方なのでしょうか。倫理的に欠陥のない聖人君子のような生き方をすることでしょうか。信仰者として完成された完全な信仰者となるということでしょうか。パウロはそれが、「**あなたがたが一つの霊によって立っており、一つの思いをもって福音の信仰のために共に奮闘しており、そして敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはない**」ことだと語ります。まず「**一つの霊**」によって立つことです。そして「**一つの思い**」を持つということです。そうすることで「**敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはない**」ということです。この最後の「**おびえさせられることはない**」という言葉は、動揺させられないとか、ひるんだりしないとか、驚かされることがないとも訳すことができる言葉です。このようにして「**福音の信仰のために共に奮闘**」するということです。わたしたちはそれぞれ個別に孤独な信仰の戦いをしているのではなく、教会の兄弟姉妹と一緒になって一緒に戦っているのです。兄弟姉妹は戦友でもあるのです。同じ釜の飯を食べ、寝食を共にし、様々な危険にさらされながらも、互いに助け合って戦うのです。同じ釜の飯を食べるとは、同じ霊の糧を共にいただくことです。そしてそれぞれに弱さがありますから、互いに合いおぎ合いながら共に戦うのです。

１．「神の国」の市民として生きること

ずいぶん前になりますが、娘がまだ高校生だったとき、体育祭に行き、様々な競技を見てきました。女子校ですが、中には騎馬戦もあって、なかなか迫力ある戦いぶりを見せてもらいました。５クラスが一対一でそれぞれ対抗し、トーナメント形式で勝負をつけます。見ていて感心したのは、最後まで勝ったチームは頭脳戦というか、賢い勝負をしていたことです。一騎ずつがばらばらに敵にぶつかるのではなくて、必ず３～４騎が一塊で一緒に

行動し、まず一騎が相手とぶつかっている間に、他の騎が回り込んで後ろから帽子を取ってしまうのです。敵一騎に、３～４騎で対抗していったので、強かったのでした。一騎ごとでは弱くても、力を合わせて対抗することで強くされていった、このことについて、この箇所から考えていきたいと思います。

「生きるとはキリスト」と、キリストのために生きると共に、キリストによって生きる自分の生き様を語ったパウロは、今度はフィリピの人々に、「キリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」と勧めます（27 節）。それでは、この「キリストの福音にふさわしい生活」とは、一体どのような生活、生き方なのでしょうか。ここで「生活を送る」という言葉は、市民として生活し、その責任と義務を果たすという意味を持っているそうです。それはフィリピという町が、ローマの植民地として発展したことに由来します。このフィリピの町には、各地で戦争に従事し、退役してこの地を与えられたローマの退役軍人が多く暮らしていました。しかも彼らは、そこで静かに、平穏にただ余生を過ごすということではなく、使命が与えられていました。それはローマによって平定され、支配下に置かれるようになったマケドニアの領地全体が、しっかりとローマの支配に服するように見張るという使命でした。そのために一般市民ではなく、兵隊を除隊した退役軍人がこの地の市民とされたのであり、つまりフィリピは軍事植民地として、ローマの領土を守る出張所、砦のようなものとされていました。ですからフィリピの市民の意識には、自分たちはローマ人であるという強い思いがあり、ローマ人らしく生き、ローマ人として振舞うことこそが、彼らの生き方となっていました。そもそもパウロがこのフィリピで、どうしてひどい目にあったかというと、その理由は、「ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝して」いるということでした（使徒 16 章 21 節）。それほどフィリピの人々は、自分たちがローマ人であることを誇りとし、ローマ人らしく立ち振る舞い、ローマ人として生きていたのです。そのフィリピの人々のように、あなたがたも自分に属する国や町の市民にふさわしい生き方をしなさいとパウロは勧めているのです。フィリピ教会の人々は、どの国に属し、どの町の市民かといえば、それは「キリストの福音」が指し示す、「神の国」です。そこでパウロは、「わたしたちの本国は天にあります」と語りました（３章 20 節）。「わたしたちの国籍は天にあります」ということです（新改訳）。フィリピ市民の人々が、自分の所属するローマ帝国の市民であることを誇りとし、その市民らしく生きていたように、わたしたちは自分の国籍が置かれている「神の国」の市民として生き、その市民らしく生活することが求められているのです。

ローマの植民地にあってローマ市民のようにではなく、「神の国」市民、天国市民として生きるとは、この世にあってこの世の者ではないように生きるということです。そこでは当然、摩擦が生じていくことになります。そしてそれがフィリピ教会の人々が直面していた現実でもありました。28 節で、「反対者たちに脅されて」とあるように、彼らは迫害の

中に置かれ、信仰の戦いを強いられていました。キリストのために生きることは、キリストのために苦しむことをも含んでいました。だからここでパウロは、「あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」と励ますのです（29 節）。そのためにパウロも、このフィリピで苦しめられました。「知ってのとおり、わたしたちは以前フィリピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語ったのでした」とテサロニケの教会に宛てて書き送っています（１テサロニケ２章２節）。その理由は、先に話したとおり、パウロがキリストの福音を語ったことにありました。それがフィリピの人々の慣習や生き方にはそぐなわないものとされ、反対を受けたからでした。そしてまたパウロは今も、このキリストの福音のために苦しみを受けているのです。30 節は、そのことを指摘します。「あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです」と。フィリピの人々も、かつてパウロが反対を受け、苦しめられたのと同じ理由で、同じ苦しみを受けているのでした。キリストの福音に生きることは、そこに信仰の苦しみを伴うとパウロは語ると共に、自らも福音のために苦しめられていきました。リストラ、イコニオン、アンティオキアでは、「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と言って力づけ、信仰に踏みとどまるように励まします（使徒 14 章 22 節）。だからパウロは、福音のための同じ戦い、同じ苦しみにあるフィリピの人々にも、「あなたがたには、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」と語って、励ますのでした。そしてそのような福音のための戦いと苦しみの中で、それに立ち向かいながら、「ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい」と勧められているのです。それはこの言葉が、単なる一般的な勧めや励ましではないということを意味します。激しい迫害と苦しみに直面する中で、語られているということです。

２．心を一つにした共同の戦い

そしてここで「キリストの福音にふさわしい生活」として勧められる内容が、続けて語られていきます。それは、「あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはない」ということでした（27、28 節）。私訳は、「**あなたがたが一つの霊によって立っており、一つの思いをもって福音の信仰のために共に奮闘しており、そして敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはない**」と訳しました。それがここで「キリストの福音にふさわしい生活」として勧められている内容です。「一つの霊」とは、わたしたちを一つにしていく霊、一つ心へと一致させていく霊、つまり聖霊のことです。聖霊によって一つとされて、しっかり立つことです。しっかり立つとは、砦に配属された兵士のように堅く立ち、要塞のように堅固に立つことです。どんな反対や脅かしにあっても、それで揺るがされたり、振り回されたり、たじろぐことがないということです。「キリスト

の福音にふさわしい生活」とは、聖人君子でもあるかのように、何か倫理的に立派な生き方をするということではありません。また信仰的に完全無欠な信仰者になるということでもありません。そうではなくて様々な困難に直面しながらも、それによって揺るがされることなく、堅く立って生きることなのです。パウロはそれが、「あなたがたが一つの霊によって立っており、一つの思いをもって福音の信仰のために共に奮闘しており、そして敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはない」ことだと語ります。まず「一つの霊」によって立つことです。そして「一つの思い」を持つということです。そうすることで「敵対する人たちによって、何一つおびえさせられることはない」ということです。この最後の「おびえさせられることはない」という言葉は、動揺させられないとか、ひるんだりしないとか、驚かされることがないとも訳すことができる言葉です。このようにして「福音の信仰のために共に奮闘」するということです。わたしたちはそれぞれ個別に孤独な信仰の戦いをしているのではなく、教会の兄弟姉妹と一緒になって一緒に戦っているのです。兄弟姉妹は戦友でもあるのです。同じ釜の飯を食べ、寝食を共にし、様々な危険にさらされながらも、互いに助け合って戦うのです。同じ釜の飯を食べるとは、同じ霊の糧を共にいただくことです。そしてそれぞれに弱さがありますから、互いに合いおぎ合いながら共に戦うのです。わたしたち一人一人は弱いです。そこで弱い一人一人がそのようにしっかりと堅く立って生きるように、一つの霊によって心を合わせられて、共同で戦うのです。共同作戦として心を合わせ、一致して戦うこと、それが「福音にふさわしい生活」として言われていることです。個々人が信仰者として立派に生きるということよりも、共同で一致して戦い、敵に揺るがされないで立ち向かっていくことであり、そこに信仰生活があるとパウロは語るのです。「わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない」と語ったパウロは、わたしたちが一人一人孤独にではなく、共同で戦うように、しかもそこで一致して立ち向かっていくようにと勧め、励ますのです。

心を合わせて戦う、その姿は神の武具を身につけるところで学んだことでもありました。パウロは、「邪悪な日によく抵抗し、すべてを成し遂げて、しっかり立つことができるように、神の武具を身につけなさい」と言って、「信仰を盾として取りなさい」と勧めました（エフェソ 6 章 11～17 節）。盾は左手で携えて、敵の剣や槍から身を守りながら、右手の剣で相手に切りこんでいきます。盾を手に携えて進軍するときには、前に進むために、右側をあけなければなりません。しかしそこで自分の右側を右隣の戦友の盾が守ってくれます。そして自分も左側の戦友の右側を守ってあげるのです。こうして自分の右側を戦友が守ってくれ、自分も左側の戦友を守るという信頼の中で、前へと進んでいくのです。そしてこの盾とは、大盾のことですが、それにはもう一つの使い方がありました。それは一つ一つの盾を縦横に連ねて、隊列を組んで敵陣に向かって攻めていくことです。こうして亀の甲らのようになることで、城壁の上から射かけて来る敵の矢を避けて、皆で一緒に敵陣へと切り込んでいくのです。このように信仰の戦いは決して孤独な戦いではなく、皆と一緒の

戦いです。同じ信仰で結び合わされた友、兄弟姉妹との共同作戦なのです。わたしたちは一人一人では弱いです。だから皆で一緒に戦うのです。弱いわたしたちが互いに励まし合いながら、互いの戦いぶりを見て教えられ、また互いに加勢し合って戦うのです。なにより友が自分のために祈ってくれている、その安心と信頼の中で共に戦うのです。このように信仰の戦いは共同の戦いであり、そこに教会があるのです。

３．聖霊に助けられた祈りの戦い

エフェソ書であげられている「神の武具」を見ると、それらの一切は神から与えられ備えられる、悪に対抗するのに必要な神の助けそのものであることが分かります。白兵戦の如き激しい悪魔との戦いにおいては、「主に依り頼み、その偉大な力によって強く」なることこそ勝利の秘訣であり、そのためには「どのような時にも”霊”に助けられて祈り、願い求め、絶えず目を覚まして根気よく祈り続ける」ことが究極的な武器とされます（同 18 節)。闇の支配者との熾烈な戦いにおいて、わたしたちが取るべきは、人間的なあれやこれやの方策ではなく、祈りの手を挙げるということに尽きるとパウロは勧めるのでした。神の武具を身につけて戦うとは、換言すれば祈りの生活だということです。わたしたちは日々の信仰の戦いにおいて、祈りの戦いをするのです。そして実は、この祈りこそ悪魔とのもっとも鋭く激しい戦いの場なのです。この悪魔との戦いは個々人の戦いであり、一人一人が立ち向かっていくものですが、しかしそれは孤独な戦い、たった一人の戦いというのではなく、皆と一緒の戦いです。わたしたち一人一人は弱いから、皆で一緒に戦います。互いに励まし合いながら、互いに加勢し合って戦う、その共同の信仰の戦いとは、祈りの戦いです。その祈りの戦いとは、互いを覚えて祈り合う執り成しの祈りの戦いなのです。互いに執り成し合うことで、祈りに覚え合うことで、相手の戦いを知り、またその戦いに励まされて、さらに相手の戦いを支えていきます。そしてこの祈りの交わり、執り成しの祈りが真実に祈られていくことこそ、ここでパウロが「キリストの福音にふさわしい生活」として語っていることなのです。それが、「あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦う」ということであり、それによって「どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはない」者とされていくのです。

来月の教会学校（各会例会）では、「奉仕」について考えていただきます。皆さんは「奉仕」と聞くと、どんな思いを抱きますか。奉仕というのは、そうした賜物が与えられた人がすることで、賜物のない自分には関係とお考えの方はいないでしょうか。あるいは逆に、自分は何もできる奉仕がないと嘆かわしく考えておられる方がいないでしょうか。奉仕というと、何か具体的に関わることと考えがちですが、一番大切で重要な奉仕は何でしょうか。どんなことが奉仕として一番大切だとお考えですか。それは礼拝出席です。とにかく毎週休まず礼拝に出席すること、これが一番大切な神への奉仕です。どうしてでしょうか。それはわたしたちが、神の御心に沿って奉仕をするためです。神の御心を知ることなしに、

自分の考えで事を為したとしても、それは「小さな親切、大きなお世話」ということになってしまうかもしれません。御心に適う奉仕をするためには、まず神の御心を知る必要があります。そしてどうやって神の御心を知るかというと、礼拝に出て、神の御言葉に聞くことです。御言葉として語られていく神の御意志、御心を受けとめ、受け入れ、それを行うのです。ですから一番の奉仕は礼拝を休まず出ることです。もう一つ大切な奉仕があります。それは他の教会姉妹のために執り成しの祈りをするということです。通り一面の祈りではなく、上っ面だけの祈りではなく、兄弟姉妹の本当の必要を知って、そのために執り成し祈るのです。皆さんの毎日の祈りにおいてもそうしておられるでしょうが、何よりも執り成しの祈りは、祈祷会で祈られます。ですから第二の奉仕は祈祷会に出ることだと言うことができます。このように礼拝と祈祷会は、教会生活の車の両輪のようなものです。ふさわしい礼拝は、祈祷会によって支えられていき、ふさわしい執り成しの祈りは、礼拝によって整えられていくのです。こうして教会は建て上げられていきます。キリストの教会としてふさわしく稲毛海岸教会が形成されていくためには、毎週の礼拝と祈祷会を欠かすことができません。一人でも多くの方が、礼拝と祈祷会を守ることをお勧めします。それが稲毛海岸教会を建てていくということだからです。

そしてこれらのことは、神によるということが大切です。28 節で、「これは神によることです」としめくくられるように、わたしたちが「キリストの福音にふさわしい生活を送る」ようになるということは、神御自身の働きであり、神の助けに基づくものなのです。このことを実現させ、完成させてくださるのは、自分ではなくて、自分を信仰へと召してくださった神であるということです。だから「福音（良き知らせ）」なのです。「あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださる」と約束され、そこからわたしたちの信仰生活が始められました（1 章 6 節）。「あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせてくださるのは神であるからです」とも約束されます（2 章 13 節）。わたしたちが全く「聖なる者」となり、「非のうちどころのない者」となるのは、わたしたち自身の努力や力ではなく、「あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます」という約束に基づくものでした（1 テサロニケ 5 章 23、24 節）。わたしたちがどんな困難に直面しても揺るがされることなくしっかりと立って、立ち向かっていくことができるように支えられていくのは神によることです。弱いわたしたち一人一人が支えられて、心を合わせて一致し、信仰の戦いに立ち向かっていくようにされていくのも、神によります。どのような苦しみに出遭ってもそこでなお信仰に揺るぎなく立ち続けていけるのは、わたしたち自身の強さや力ではなく、聖霊の助けによるのです。そしてこの聖霊の助けにより、聖霊の働きの中でわたしたちが立たせられていくとき、「キリストの福音にふさわしい生活」へと整えられていくのです。このようにわたしたちの「内に働いて、御心のままに望ませ、行わせてくださるのは神」です。この内なる聖霊の働きの中で、「福音にふさわしい生活」を為していきたいと思います。